
コメント (1)

Comment (1)

平野千果子 HIRANO Chikako
(武蔵大学教授)

これまでフランスの植民地帝国の歴史について研究してきたが、基本的にフランス史、あるいは西洋史という枠から非ヨーロッパ圏をみるという形をとってきた。その意味では特別に北アフリカを中心にしてきた、というわけではないが、北アフリカのアルジェリアは近代フランスの最大で最重要の植民地であったため、必ず視野に入ってくる地域であり、不十分ながらも学んできた点はある。こうした限られた範囲からではあるが、「フランスのアルジェリアへの眼差し」におもな焦点をあてることで、コメンテーターの役割が果たせればと考えている。

スペインにかんしては、おそらく私自身がステレオタイプ化されたイメージをもっていたように思う。つまり植民地の歴史という視点からすると、スペインに関連して思い浮かべてしまうのは、レコンキスタ、そして南米、という流れである。それが今回のテーマは、私がフランスとの関連において取り上げてきた北アフリカとスペインの近現代史ということで、大いに視野を広げてもらったと思う。また同じ北アフリカにしても、フランスに軸をすえているとアルジェリアに偏りがちである、ということも含め、モロッコを改めて見なければならぬ、という思いを新たにした。

今日はまず、各報告について一言感想を述べることから始めたい。最初のコラーレスさんのご報告は、普段はみられないOHPの図版も多くあり、たいへん興味深かった。フランスにおいても植民地時代についてのさまざまな図像（イメージ）を解析していくというのは、近年盛んに行なわれている手法で、おそらくは重なる面もかなりあるのではないだろうか。そのなかで、いくつか転換の時期が示されていたが、フランスに関連して述べると、十字軍の時代はともかく近世には、フランスはオスマン帝国とは友好的な関係を保っていたので、イスラム・イメージもさほど悪くはなかったと言われている。それが変化していくのは、コラーレスさんも触れられたように、18世紀末のナポレオンのエジプト侵攻を契機とする。エジプトはオスマン帝国の版図に含まれていたものであり、そこに従来はオスマン帝国と友好関係にあったフランスが攻め込んだのは、それまでの状況に変更を迫ることになったからである。

その後の展開を少し整理するなら、1820年代のギリシア独立戦争にさいしては、フランスは明確にオスマン帝国に反対をしてギリシアを支持していく。さらに1830年に、やはりオスマン帝国の版図にあったアルジェに派兵するのだが、このときの侵攻がフランスの北アフリカへの直接支配の出発点となる事件である。これはフランスとオスマン帝国、双方の関係を決定的に変えた事件と言っているかと思うが、同時にイスラムに対するイメージも、マイナスの要素を含んで

多く語られるようになり、19世紀半ばのフランスでは、ほぼこのマイナスのイメージが定着したというのが、およその見取り図である。そういったステレオタイプのなかにも、またステレオタイプ化された図版の背後にも、もっと分け入っていく必要はあるだろうとも思われるのだが。

二番目のジビルーさんのお話についてだが、これこそ、流布されているイメージとは違うものということで、大きな関心をひかれた。スペインとモロッコというものが「近くて近い隣人」なのだろうか、ということも考えた。お話の中心であった文学にかんしてだが、日本では過去10年ほどの間に、フランス語で書くモロッコの作家たちの作品が少しずつ紹介されてきた。ジビルーさんも言及されたが、タハール・ベン・ジェルーン、あるいはアブデルケビル・ハティビのような人たちが「マグレブ文化の複数性」などについて書いたものがあり、それらが近年では日本語で読めるようになってきている。先ほどフランスから北アフリカを見ていると、アルジェリアに偏りがちであることを指摘したが、この報告に関連しても同様に、モロッコにスペイン語で書く作家がいるということは迂闊にも考えてこなかった。この点についても視野を広げていただいた。

三番目の深澤さんのお話は、私自身の研究の中心が近現代史なので、いろいろと教わることも多かった。とくにスペイン戦争をめぐることは、やはり別の意味でのステレオタイプが流布されてきたのではないだろうか。すなわちこの戦争は内戦であったにとどまらず、国際化された紛争であったという点や、それに関連する義勇兵の問題など、国際政治の枠組みで語られる場合が多かったように思う。それがスペイン戦争の時にこれほど「モーロ人」をイメージとして利用していたという事実は、私にとって新しい発見でもあった。そもそもスペイン戦争については、改めて言うまでもなく、フランコはモロッコから挙兵をしたわけであり、もう一度足元にもどって、フランスとスペインが分け合った植民地としてのモロッコを考え直してみたいと思う。

またフランスとの関係でいうと、二番目に触れられたリフ戦争、これはフランスも途中から参加したものだが、この戦争は結党後間もないフランス共産党が初めて直面した大きな植民地問題であったこともあり、いわゆる「左翼と植民地の問題」という意味から、たいへん大きな論点がはらまれている。この点は、今後も研究の進展が期待される領域である。

それでは次に、「フランスからのアルジェリアへの視線」という私の研究に即した観点から、二点ほどコメントとして述べていきたいと思う。まず第一点として、現地の人びとへのまなざしについて考えてみたい。スペインから見ると、モロッコ人をひとまとめに捉えて、そのなかで「良い人たち」「悪い人たち」という分けをしているというお話が随所で聞かれた。フランスのアルジェリアの場合はやや異なっている。アルジェリアの住民のなかにはさまざまな民族がいるが、現地民については大きくアラブ人とベルベル人と分けて捉えるのが、フランスでは一般的であった。ベルベル人が居住していた北アフリカに、7世紀にアラブ人が東から侵攻してきたものである。フランスでもベルベル人はやはり「モール人」と呼ばれたり、また山岳地帯のカビリア地方に多く居住していたことから「カビリア人」と呼ばれたり、いくつかの呼称があった。ちなみに山岳地帯に追いやったのは、侵攻してきたアラブ人である。

このアラブ人とベルベル人の二者については、ベルベル人を高く評価して、反対にアラブ人を

低く位置づけるというのが植民地時代のフランスでは広く支持された見方だった。その根拠は、ローマ帝国にまで遡る。ローマ帝国がキリスト教であった時代だが、その時ローマ帝国の版図に入っていた北アフリカの住民はおもにベルベル人であった。古代キリスト教を代表するアウグスティヌスなども、北アフリカ出身のベルベル人である。その後、そこにアラブ人が侵攻してきて、キリスト教の北アフリカをイスラムに変えていったわけだが、そうした経緯が19世紀以降、植民地化の企図を正当化する根拠として取り入れられていく。フランスがアルジェリアに侵攻するのは先にも述べたように1830年だが、その後の植民地化の過程でフランスの植民地化は「文明化」であるという理屈が唱えられていったのは、今日では周知のことに属すだろう。実はそこには、ローマ帝国時代に北アフリカはキリスト教であったのに、アラブ人のためにイスラム化してしまった、それをもう一度フランスが文明化＝キリスト教化する、ということも含意されていたのである。

このことは、「本来キリスト教徒だったはずのベルベル人」と「イスラム教徒のアラブ人」の間に優劣をつける形で植民地時代にはさらにはっきりと表現されていく。すでに19世紀半ばには、「アラブ人よりもベルベル人のほうが文明化しやすい」、あるいは「文明に向いている」といった書き方が散見されるし、アルジェリアを視察したアレクシス・ド＝トクヴィルの手になるものにも、類似の視線が読み取れる。

こうした見方の背後には、イベリア半島にイスラム支配の時代から残されていた文化への憧憬があったことも忘れてはならないだろう。代表的な事例としては、何よりもまずアルハンブラ宮殿があげられる。フランス人の記憶のなかでは、歴史的事実とは別に、征服者は必ず「モール人」であり、決してアラブ人ではない。ヴィクトル・ユゴーの詩集などにもそうした視線は表現されている。アルハンブラ宮殿とアラブ人、という結びつきは、フランス人の感覚からは考えられないものであり、要するにアラブ人が「高度な文明」の担い手として捉えられることは基本的にないと言ってよい。

ローマの栄光の時代もベルベル人が主体であり、イベリア半島の文化的遺産もベルベル人が主体であるという見方は、支配のなかで「優れたベルベル人とそうでないアラブ人」という二分法を根底で支えたと考えられる。当然のことながら、この一方にはフランスの分断政策という側面があることも、つけ加えておく必要はあろう。

さらにこのような二分法が、独立戦争期のアルジェリアにまで引き継がれた点を指摘しておきたい。アルジェリアではすでに第二次世界大戦前、民族運動のなかでアラブ中心主義が前面に出てきていた。1930年代から唱えられた「アルジェリアはわが祖国、イスラムはわが宗教、アラビア語はわが言語」という標語は、それを端的に示しているだろう。その延長として、独立後のアルジェリアは全面的にアラブ化政策を採用するのだが、こうした長い歴史の結果、アラブ人とベルベル人の対立は今日まで尾を引きたいへん根深い問題となってしまった。これは植民地時代に根をもつ、大きな負の遺産のひとつである。

コメントの二点目として、もう少し大きな範囲で地理的概念にかかわることを話してみたいと

思う。私自身は、イベリア半島と、それから北アフリカの西の端であるモロッコを訪れたことがあるが、やはり非常に近いという感覚をもった。これはジビルーさんのお話にも何度出てきたことであり、その「近い」と感じたものが何かをひとつに限定するのは難しいが、非常に単純化して言えば、いわゆる「地中海性気候」といったような肌で感じる感覚もなかにはあると思う。そうした両者を結ぶひとつのキーワードは、結局のところ「地中海」になるであろう。

「ピレネーを越えるとヨーロッパではない」という言い方がある。あるいは同じことだが、フランスでは19世紀の作家テオフィル・ゴチエが「アフリカはピレネーに始まる」と述べたともされている。「イベリア半島がヨーロッパではない」とみるのか「イベリア半島からアフリカが始まる」とみるのか。このことは視点を変えて、「地中海はヨーロッパなのか、アフリカなのか」という形で問うこともできるだろう。

こうした一般的な物言いとは別に、フランスでは戦間期の1920年代から30年代に、サハラ砂漠までがヨーロッパだ、とする主張が一部に出てきている。その背景には、フランスがアルジェに派兵をした1830年以降、フランスの北アフリカ支配のなかで形成されてきた視線があると思う。つまり近代フランス最大の植民地アルジェリアは、支配の初期のころから「フランスの一部」あるいは「フランスの延長」とされており、これは独立戦争期においてさらに盛んに唱えられるものである。現実にはアルジェリアが行政上フランスに組み込まれたということもあるが、意識の上での一体性はかなり比重として大きい。「パリをセーヌが流れるように、フランスを地中海が流れる」という独立戦争期にも流布された表現は、まさにフランスとアルジェリアをひとまとめにして「フランス」だとみる立場である。

そのアルジェリア支配を固めるために、東西両隣のチュニジアとモロッコの植民地化をフランスはさらに推進していき、最終的なモロッコの植民地化（1912年）で北アフリカ全体を一体として捉える見方が完成したと言えるだろう。その後、第一次世界大戦を経た後の戦間期は、フランスの植民地帝国の版図が最大規模になった時でもあり、フランス社会のほぼすべての分野において、人びとが植民地を謳歌している時代でもあった。そうした時期に、「サハラまでがヨーロッパである」という主張が唱えられてきた、といった流れだと整理できる。

ここでアルジェリアに住んでいたフランス人に、少し目を向けてみよう。最近の研究では、ちょうど戦間期にアルジェ大学に集っていた知識人がひとつのグループを作っていたようで、彼らを「アルジェ学派」と呼ぼうという提案がなされている。それによると、彼らはフランス人として北アフリカにいるわけだが、歴史的に遡るとその淵源にはローマ帝国がある。ローマ帝国が地中海を囲む形で、ある種の同質なものを作り上げたのにもかわらず、その後の歴史の過程で崩れていったのであり、それを自分たちが再興する、再び作る、という考えが、強くこのアルジェに集まっていた人たちのなかにあったという。これは新たな一体性を作る主体はフランスであるとする意味において、もちろんフランスの支配の正当化につながる思考である。ただしアルジェ学派の人びとは、自分たちが「フランス人」であるという感覚よりは「ラテン」であるという認識の方が強かったというのは、興味深い。自らを単にフランスに結びつけるよりも、過去と

の連続性により大きな存在事由を求めているとも考えられるからである。

この背景としてつけ加えておこななら、もともとアルジェリアに入植したのはフランス人ばかりではなく、スペインやイタリアなど南欧の人たちも多く、割合では入植者の半数ぐらいが非フランス系のヨーロッパ人であった。制度的には、1889年に本国フランスで国籍法が改正されたのに合わせて、アルジェリアでも出生地主義が採用されたのだが、その結果、入植者たちは出身を問わず、アルジェリアで生まれればフランス国籍をもつことになった。ただしこの時代になると、大半は本国を知らない「フランス人」である。アルジェ学派の人びとが、自らを単に本国フランスに結びつけるよりは、幅広くラテンだと認識していたというのは、こうしたアルジェリア生まれの人びとの現実にも重なる部分があるだろう。

そのような雰囲気を表わすものとして、「ラテン・アフリカ」という言葉を紹介しておきたい。戦間期という、フランスが植民地を謳歌している時代に生まれたもので、アルジェ在住のフランス人作家が生みの親とされている。ここにはラテンとしての北アフリカ、さらに同じ「ラテン」としてのフランスとの一体性が表現されているわけだが、それにとどまらず、遠いローマ帝国が視野に入っていることも読み取れるだろう。アルジェに集っていたフランス人の雰囲気、あるいは空気というものを端的に示す言葉ではないだろうか。

ここアルジェに集った人たちに関連して、『地中海』の著者フェルナン・ブローデルにも一言ふれておきたいと思う。ブローデルは、1920年代から30年代にかけてほぼ10年間アルジェリアに住んでいた。高校の教師だったので、アルジェ大学を拠点としたいわゆるアルジェ学派に含まれるわけではないが、知的交流は盛んだったようで、そうしたなかから『地中海』のような大著の構想を得た点も、最近指摘されている。植民地世界といういわば異種混交の特殊な雰囲気のなかでの知的交流が生み出したもの、とでも言えようか。この時代にアルジェリアにいたヨーロッパ系の人びとや、当時の文化状況などについては、これから取り組んでみたいと考えている課題である。

以上二点が報告を聞いての私からのコメントだが、最後に報告者三人にそれぞれ質問をさせていただきたいと思う。コラーレスさんには、今の話と関連しておそらく適任と思うので、ブローデルの『地中海』のような本がスペインにおいてどのように受容されているか、ということを教えていただければと思う。次にジビルーさんはモロッコのなかのスペイン語作家のことに言及されたが、モロッコにおけるスペイン語作家とフランス語作家の間の相互交流、あるいは互いにどのように評価しているか、というようなことについて一言いただければと思う。もとよりこうした点は、日本ではまったく紹介されていない。そして最後に深澤さんには、途中で「モロッコのローレンス」という言葉が出てきたが、これはおそらく植民地支配のなかでさまざまに出てくる例のひとつではないだろうか。だからこそ「第二の」ローレンスとも言われるのだと思うのだが、こうした点について何か補足することがあれば、ぜひおうかがいしたい。